

蔵原 大

戦う「ショートショート」 又はボーイ・ミーツ・ガール

FIGHTING "SHORT SHORT" OR A BOY MEETS A GIRL

……“電撃戦”なる語は、実際に行使された戦術方式を表現するのにも便利なものとなった。アメリカン・ヘリテージ辞典の“ブリッツクリーク”の項にも、「速やかで不意打ち的な軍事攻撃で、通常空・陸両軍の共同作戦として行なわれる」と定義している。

ーレン・デイトン『電撃戦』

あれは地球壊滅から七年くらい経った頃のことだろうか。特に重要でも何でもなく、殆んど人類やAI（人工知性）が、まして地球外知性体であれば絶対聞いたこともないし鼻にもひっかかない辺鄙な村での出来事だった。その村があったのは、とある赤い大地のそのまた僻地。百年来の営々とした事業で活気づき、宇宙を舞台に活躍する巨大企業がいくつも本部を置いているこの地にも、残念ながら資本の流れに取り残される敗残者は大勢いるものだ。裕福な連中はドーム都市に住む。そこは与圧された快適な環境。そしてドームの広さにはおのずと限界があり、当然ながら住めない連中が出てくる。そう、貧乏人や生きるのに飽いた者たちの吹き溜まり、とでも呼べばよかったのだろうか。鉄道の支線さえ通らない、あのコンクリート集落の荒れ果てた感じは。

村の名前？ もう今となっては誰も憶えていない。思い出そうとする酔狂なやつもないはずだ。まあ村の広場からはそう、高さ二七〇〇メートルにして途方もなく横に広がる盾状火山、そして山のとっぺんから天空向かってそびえ建つ軌道エレベーター（Space Elevator）が辛うじて遠くに見える平野にあった、とだけ言っておこう。最大限に贅美すれば風光明媚なのかもしれないが、客観的にいえば繁栄に取り残された過疎地にすぎない。なにしろメッシュ通信網、大昔のインターネットよりずっと進んだネットワークシステムにさえ日和が悪ければ接続できない、というのだから、その文明度は推して知るべし。半世紀以上昔、移民が希望とともに入植を始めた時代には栄えていたであろうその地は、例えるなら輝いていた青春の成れの果て、貧富の差が一向に解消されない世紀の縮図だったのかもしれない。いずれその地には涙の流れる運河が現れることだろう。

さてその村の、まあ場所なんかどうでもいいが、どこかにあった古ぼけコンクリートの階には、これまた同じくらい老朽化した連中の巢窟と化している薄汚い酒場があった。やさぐれた初老や目皸のたるんだ中年が数名いる他、やる気のないバーテンダーはカウンターの奥で居眠り中だ。

そんな面々が愚にもつかない会話で夕刻を潰している中、明らかに別格の、一応は身なりの小ざっぱりとして（もちろん他の連中に比べればという意味だが）赤い制服をまとった六人の男が肩を怒らせ、腰のサブマシンガンをガチャガチャいわせながら出ていく。その胸を飾

る安ピカのワッパンが一際目につく。六人の男は相当にきこしめしていたのだろう。勘定を払わずにパカ笑いしながら会話を続ける武俠集団は、やや覚束ないフラフラとした足取りだった。そうして店の出口で小柄な少年とすれ違う時、ギロツとガンを飛ばしたが、特に何ということもなく去っていく。くたびれた黒いローブとフードで全身を覆いつくした少年は、目立たない酒場のさらに隅にあった黒い鉄製テーブルに腰を落ち着ける。

その隣のテーブルには、年の頃は四〇歳くらいと思われる、眠たげな表情をした中年オッサンが特に何ということもなく座っていた。中背の屈強そうなボディ、足を伸ばして脇に長いライフルを抱え、あご髭をちょっと生やしてリラックスしているその印象は、警官でなければ傭兵といった雰囲気だ。

「おい、運がよかったな、坊主」

「ん、なぜ？」

「連中さ。ヨソ者には大抵カラらんでくる。特に組しやすそうな奴にはな」

「フーン、で連中って何アレ？」

とりわけの関心もなさそうに、というよりは一応お義理でという感じではあるが、声変わり前なのか柔らかいハスキーな口調で聞きかえす少年。対して中年男の方は退屈しのぎなのか、あくび混じりに低く渋い声で言葉を続けた。この星の気だるげな夕べにシリアスな話は似合わない。

「たしかオリンポス自由……戦士友愛団（Olympus Free Fighters' Fellowship）とか……言ってたな」

「何それ、初耳だ」

「本人たちは自警団を気取っている。ティターンズの再来に備えて郷土を守るんだと」

「あの程度で？ スゴイ勇気だね」

少年の顔はフードにすっぽりはまっているが、それでも微かに表情を崩すのがわかる。それににつられて中年男もついニヤリ。七年前に地球という星の文明を滅ぼしたAIの大艦隊、人類の生み出した最強の超兵器「ティターンズ」はじつに無敵だった。その残虐さを耳にせぬ者はまずいるまい。そして何故か突然、ティターンズはいずこにか消えてしまった。完全勝利まであと一歩のところまで。その再来の可能性を懸念しない者はめったにいない。

「ああ、あの程度でな。だがやっているのは俺の見た限り、無銭飲食、ゆすりにたかり……有り体に言えばゴロツキだ」

「シェリフは何をしてるんだ？」

「何かしようとしたらいい」



「フーン、それで？」

「シェリフと助手は二ヶ月前に死んだそうだ。脳卒中だとか、友愛団曰くな」

「であなたは？ ここで何をしてるんだ？」

「質問が多いな、坊主。好奇心を発揮する時は TPO に配慮した方が生き残れるぞ。口数と物陰には気をつけるんだな」

「ご忠告、どうもありがと」

しばらくすると、外から微風に乗って誰かの悲鳴が聞こえてきた。それと複数の人間の野卑た笑い声が。その年老いた感じのガラガラ悲鳴が泣き叫んで助けを請うと、外の嘲笑はますます高まる。店内の大勢は知らん振りで会話を続けている。きっとみんな聞き取れないのだろう。未だテラフォーミングが完了していないせいで、この星の気象は救いを求める人の声を伝えるには少々薄かった。

「あれは何？」

「徴税タイムのようだな。善良な村民に募金を求めているのさ」

「誰か治安当局に通報しないのか？」

「始めのうちは村の連中も通報したんだそうだ。誰もやってこない、何も変わらないと悟るまではな。なに、ここいらの田舎じゃよくあることさ」

「あなたや村の人は何もしないの？ 目の前の蛮行に対して？」

「俺は通りすがりの観光客だ、お前と同じようにな。俺達の領分じゃない」

「それはどうかな」

フード少年は立ち上がると、部屋の隅の階段に向かう。ちょっと覗き込んだ後で、上に続く段に一步足をかける。中年男もつられて、手元のライフルを持ったままゆっくり立ち上がる。

「どこに行く、坊主」

「高い所に」

「何のためだ」

「見るんだ」

「見てどうする」

「高い所は便利だ。そこからは見ることも撃つこともできる。『およそ軍は高さを好みで低さを悪み、陽を貫んで陰を賤しむ』ってね」

「軍隊がナンだと？」

二人はそのまま昇り、遂にビルの屋上に出た。打ちっ放しで埃まみれのコンクリート平面の向こうには弱々しい恒星の輝き、薄茶けた空、赤黒い岩石砂漠の地平線、そして近くにゴチャゴチャ立ち並ぶくすんだ安普請の家々の間にある、約六〇メートル先の少し開けたスペース。そこでは六人の荒くれ男が腹ばいになった白髪の人を蹴ったり嘲ったりしている。周囲には誰も寄り付かない。



テロリズムは、サボタージュとならんで、革命の基本的な武器の一つである。世界には多数のテロリスト・グループがあり、その多くが高度に訓練され、充分な装備を持っている。

……しかし彼らに共通する点が一つある。それは、彼らが自分たちの目的を達成するためには暴力もいとわいないことだ。(p.60)

—マイク・ロビンソン、北島護訳、柘植久慶監訳
『SAS戦闘マニュアル』(並木書房、1992)

「あれで“友愛”団なの？」
「そうらしいな、やれやれだ」
「頭数はあれだけ？ まさか少数精鋭を目指してるってわけじゃあ……」

「いや。聞いた話だが三、四〇人はいるそうだ。練度はお粗末だが、どこからか戦時中の装備を入手したらしい。オンボロのバギーとかSMGとか。あの今見えている連中のような」

「本拠地はどこにあるのかな？」
「村外れの鉱山跡だそうだ。バーテンダーの話ではシャーウッドだと自称しているとか」
「ご大層な義賊さまだ。あなたも仲間入りするつもり？」
「頼まれてもゴメンだな」
「どうして？ 金はありそうだけど」
「第一に俺には先約がある。第二に俺はバカなクズは嫌いでな」
「同感」

言うなりフード少年は一〇メートル下の地面に飛び降りた。青い地球でなら彼は即死だったかもしれない。しかし赤い惑星の弱い重力はそれほど酷ではない。フワッとローブを広げながら薄暗い路地裏に易々と着地した彼は、衣服に付いた粉塵をざっと払うと、懐中からゴソゴソ何やら取り出した。それを中空に放り投げると、豆粒ほどの大きさの何か二つが音もなく飛んでいく。それから少年は大通りに出て、といっても舗装のないただの広い道なんだが、慌てず騒がず広場にゆっくり近づいていった。

あと五〇メートル、四〇メートル、三〇メートル……ゆるやかな風に吹かれて砂塵が赤々とあたり一面に舞う。

「オーイ、兄弟っ」
「アーン？ 誰だ、テメエ」
「爺さん放してあげなよ。隣町にグラマー娼婦がいたぞ。その方が楽しいだろ？」
「うるせえ、ガキはすっこんでろ。それとも大人の遊びつてのを教えてやろうか」
「大人の？ 大人というのは良識と自制心を持った人のことなんじゃないのか？」
「おい、ガキ。なめた口利くじゃねえか。テメエも卒中でポッキリ逝きてえのか」

ゴロツキの一人が歯をむき出しにして前に出ると、腰のSMGを抜いてフード少年の方に振り回す。あざけり笑う仲間の与太者たち。老人はグツリと倒れてケレンしている。

ところが少年は明るい声で「まあまあ兄弟、落ち着いてよ。耳寄りな話があるんだ。聞いてくれる？」と言いつつ両手を挙げて歩み続け、そろそろ相手から一メートルの距離にまで迫る。

「何だ、耳寄りな話ってのは。下らねえことスカすとブツ殺すぞ」
「まあね、確かに下らないんだけど。そちらが先に抜いた以上、こちらには正当防衛が成立する」
「な、何だとう？」
「ねえ、あなた。仲間を撃て」
「あああ？」

「仲間を、撃て」
「あ？……ア、アア」

そのゴロツキの目からは反抗的な輝きが失せ、言われるまま従順に、仲間に向けて銃を擬す。ギョッとする五人の荒くれ男。怒声、罵声、銃を抜く音が一齐に響く中、少年は「撃て」ともう一度ささやく。タタ……乾いた銃声が広場から拡散していく。

SASは、ほかの陸軍部隊と同じように、軍の交戦規則にしたがって行動する。規則では、発砲する前に警告を発し、相手に降伏する機会を与えることになっている。しかし、SASでは、警告やその他の遅滞が、自分たちや他の人間に危害をもたらすと判断したときには、即座に銃火を開く。また、警告が適当でないと思われる場合についても同様だ。(p.87)

—マイク・ロビンソン、北島護訳、柘植久慶監訳
『SAS戦闘マニュアル』(並木書房、1992)

やおらに少年は横に素早くスライドし、着ていたローブをガバと剥いて男たちに投げつけた。フワリと広がって皆の視界が遮られる中、パンパン、新たな種類の銃声が響き渡る。ローブの向こうから飛び出してきたのは黒いTシャツと黒いズボンをまとい、肌は黒々として身長一六〇センチあるかどうかという小柄で痩せた少年、いや少女か？ 眼光鋭く、さっと身を低くし、きびきびと左右にフットワークも軽い。そうして男たちが撃ちまくる弾丸をまるで見えているかのように難なく避けながら、慣れた手つきで構えたピストルをぶらさずに撃つ、撃つ、撃つ。男たちの胸部に九ミリ口径の穴がブスブス開き、胸と口から赤い液体を吹き出しつつクルクルとダンスを舞う。死の舞踏だ。

この少年もときは何を考えてこんな暴挙に出たのだ？

[[サイモン、戦況分析]]

[[マスター、ユニットE1、E2、E5の無力化を確認。E3、E4、E6は当方を照準中。N1は無傷。スペック (Speck) A及びMは上空直掩中]]

[[了解。E3、E6に対する射撃解析値を算出。両スペックに対してE4への急降下爆撃を発令。N1に彼我の盲弾が当たらないよう注意して]]

[[算出完了。方位一四九に全速移動しながらの射撃を推奨します。両スペックは攻撃開始]]

[[よし、走ろう。スピードは即ち兵器だ!]]

髪短い少女は無言のまま駆け出し、男たちの前をすばやくジャンプしながら銃を持つ左手を伸ばし、相手の顔面すれすれに正確無比な発砲。そして人間の頭蓋骨がいかに頑丈でもタイタン製のレーザー誘導式超軽量徹甲榴弾をまともに受けてはかなわない。二人の男の頭は弾け、赤いのと白いのを撒き散らしながら倒れた。残る一人はすばしい標的を仕留めようとSMGを撃ち続けるが、不意に絶叫して銃を落とし、全身を掻きむしる。微かな羽音を立てて飛び去る二つの黒点。そしてゾッとして振り返った男の目玉に移った最期の光景はピストルの小さな銃口。パン。

……拳銃は昔から護身用の武器とされている。しかし、SASでは、拳銃はしばしば攻撃用火器の中核として用いられているのだ。(p.16)

ハイパワー (FNブローニングの9ミリ・ハイパワー No.2 MK1) はSAS連隊で愛用されている拳銃である。一般に、自動拳銃がリボルバーより優れている点は、より多くの弾薬を収容できることと、再装填が簡単なこと、そして同じ銃身長ならば、リボルバーより軽いことだ。それに加えて、ハイパワーは弾倉に一三発の9ミリ弾をこめられ、薬室に一発装填しておけば、一四発を携行することができる。(p.17)

—マイク・ロビンソン、北島護訳、柘植久慶監訳
『SAS戦闘マニュアル』(並木書房、1992)

と同時に遠くから長く鋭い銃声が。振り返った少女の後方二〇〇メートル、灰色ビルの影にいた人らしき物が倒れる。視線を元に戻すと、震えながらうずくまる老人、赤い大地をさらに赤く染める六つの遺体のその向こう、先ほどまで彼女が立っていたビルの屋上に、こちらに向かって手を振る人影がある。人影は引込んだ。とそこでメッシュ通信が少女の脳内に響き渡る。

[[無事だったようだな]]

[[ありがとう、援護してくれて]]

[[たまたまだ。ライフルが暴発したのさ]]

[[あの人は撃つには遠すぎたんだけど、あなたが処理してくれて助かったよ]]

[[忠告したろ、坊主。口数と物陰には気をつけろと……いや、女の子かな?]]

[[これでもレディですよ]]

[[おや失礼、マイレディ]]

[[どういたしまして]]

ライフル持ちの中年男はやがてビルから出てきて、広場の方に歩いていく。そこでは少女が老人を抱き起こし、脇の方に連れて行って介抱していた。中年男が近づいていくと、髪を短く切った少女は男に対して明るくニコリ微笑みながら優しく話しかける。

「ついでお願ひがあるんだ。この人の面倒、少しの間だけ見てて」

「大した腕前だったな。初手のは催眠術か何かか?」

「まあね。彼の脳内コンピュータに欺瞞情報を送信したんだ。仲間が背中を狙ってるって」

「中々のヒット作だ。だが豆鉄砲一丁でよく突っかかる気になったな。先に撃たれていたらSMGにアウトレンジされていたぞ」

「そのリスクは覚悟してた。でもまあプランBがあったし、充分近づける目算もあったから」

「ほう、どんな目算だ。差し支えなければ聞かせてくれ、レディ」

「あの人たちは強がっていた、誰の目にも明らかに。だけど『辞の強^{つよ}くして進^{しん}駆^くする者は退^{たい}かんとするなり』だから、本当は弱味があるのかもしれない。ならその弱味につけこんでちよっと餌をチラつかせれば、食いついてくるかなって思ったわけ」

「手品のタネはいつも単純だな。だがこれからどうする。連中のそのまた仲間がお礼参りに来るぞ」

「だからザッパしたのよ。情報収集を兼ねて」

「うん、ザッパだと? 何だそれは」

SASの隊員は、ひとりひとりが、使うと使わざるとにかかわらず、高度の自己防衛術と徒手格闘術を身につけるよう義務づけられている。SASの隊員は暴力的性向によって選ばれるわけではないが、隊員たちはそれでも、近接戦闘や敵を容赦なく殺さねばならぬ特殊任務において自分が生き残るためには、違ったタイプの兵士にならねばならないことを知っている。状況に応じて、感情を断ち切り、本能と訓練のままに行動できる兵士となるのだ。(p.119)

—マイク・ロビンソン、北島護訳、柘植久慶監訳
『SAS戦闘マニュアル』(並木書房、1992)

中年男と老人を尻目に、少女は周囲を窺いつつ広場の遺体に歩いていく。ピストルに新しい弾倉を装填しながら。それからざっと物色した後、倒れ伏す一体の後頭部を撃つ。標的は弾けて白いのと赤いのとが飛び散る。少女は自分の首筋に右手をまわし、細いワイヤーを引っ張り出すと一端を持つ。そして屈みこみ、弾けた頭部の中にその手を突っ込んだ。グチャグチャ、グチャグチャ、奥の方を探りながら何かを思案するかのような顔つきをする。

[[あなたは知ってるかな、『用兵の法は、其の来らざるを恃むことなく、我の以って待つあることを恃むなり』って。こちらから出向けば骨折り損。だけど向こうが来るなら邀撃戦に移行できるし、来ないなら来ないで村人は安泰。いずれにせよ勝機は我が方にある。ちなみに、ああ、この人の皮質記憶装置によると友愛団員は全部で十九名、違った、今は十三名だったね。フーン、重火器は大半がジャンク品だって]]

[[あざといな。死者の魂を覗くとは。オーバーキルという言葉を知っているか]]

[[別に好きでしてるわけじゃない。だけど『爵禄百金を惜しみて人の情を知らざる者は不仁の至り』だから。あれ、この人、心底の悪党じゃない。始めはそれなりに理想を信じてたのか。でも段々と捻じ曲がってしまった。ごめん。もしお互いに分かり合おうと努力していれば、こんな結末には……えっ、先月分の給金は未払いのまま! ひどい兵站事情だね。『輜重無ければ亡び、糧食無ければ亡び』か。貧しいってむごいな。あ、そうか、もしかして彼の弾丸は……ああやっぱし、あたしのとは互換性ないオールドタイプだ! まったく使えないな、もう]]

[[まったくなんて二枚舌だ。いった……待てよ、それは[孫子]の引用か?]]

[[えっ、今なんて?]]

彼女は中年男の方に振り返る。驚いて見開くその瞳は遠目にもキラキラ輝く。

[[士官学校で習った。兵は……兵は迅速を貴ぶ……だったか?]]

[[それ「作戦篇」ね。正しくは『兵は拙速を聞くも未だ功久しきを見ず』。あたしの引用を理解した人、この星に来てからあなたが初めて! 失礼だけど、お名前は?]]

[[アレックスだ。君は?]]

[[孫。知り合いからは「ショートショート」って陰口叩かれてるけど]]

と少女は立ち上がり、今度は隣りの遺体に向き直る。パン、とまた乾いた銃声。グチャグチャ。顔色一つ変えずに淡々を作業を進めていく彼女は、先入観を持たずに見る限りでは中学生、それも男子生徒といっても通用しそうだ。血液やら脳髓の破片やらが衣服にこびりついているのを忘れれば、本当に生き生きとしていて可愛いらしい。だがグラマーな大人の女性には程遠く、どちらかといえばその美しさは少年のようだ。胸のふくらみはかすかで、華奢な骨組みからヒョロ長い手足が突き出ている。その手首はあれでよく銃を扱えるものだと変に感心させられてしまうほど細い。

[[なるほど。体がチマイ分、肝がデカイのか。悪くないバランスだ]]

[[なんだか嬉しくないな。ところであなた、ここで何をしてるの?]]

[[言ったらう、先約があると。仕事先のエージェントを待っている。そっちは]]

[[人探し。でも空振りに終わって帰宅するところ]]

[[レディなら寄り道しないで家に帰るべきだな]]

[[まあね。でもこれも間接的には職務だし。ところで待ち人が来るまでアルバイトしてみない?]]

[[はした金では動かんぞ]]

[[一日一〇〇クレジット、キャッシュで。経費込み。任務はあたしの援護]]

[[二〇〇]]

[[一五〇]]

[[いいだろう、孫子さん]]

[[孫よ、ただの]]

少女は再び立ち上がり、拳銃を腰のホルスターにしまうと、中年男の方に歩いてきた。そして瞳を輝かせつつ澁刺とした表情で、左手を差し出す。その手にこびりついた返り血は乾燥した大気になぶられてカサカサになっている。

「よろしくお願ひします、パートナー」
「ああ、よろしくな。マイレディ」

中年男と少女はお互いの瞳を真っ直ぐ見据えて、握手を交わす。火星の地にて、淡い夕焼けを背に。

〔完〕

前向きな心の持ちようは、しばしば最新の薬物よりもはるかに治療の助けとなるのだ。SASの隊員は、胸に口をあけた傷口にハンカチやシャツの切れはしをつめ、重傷で手足を切断されながらも、戦いつづけることで知られている。意志力と決意を持つ人間にとって、不可能なことは何ひとつないのだ。(p.127)

—マイク・ロビンソン、北島護訳、柘植久慶監訳
『SAS戦闘マニュアル』(並木書房、1992)

献辞

偉大なるヒーロー像を身をもって作り出してきた偉大なる俳優にして映画監督クリント・イーストウッド (Clint Eastwood) への限りない敬意を込めつつ本短編を締めくくる。

参考文献

- Lars Blumenstein, Rob Boyle, Brian Cross, Jack Graham, John Snead and etc., *EclipsePhase-2nd* (Posthuman Studios, LLC., 2009) (<http://eclipsephase.com/releases>)
- Rob Boyle, Brian Cross, Diane Piron-Gelman(eds.), *Sunward The Inner System: A Location Sourcebook for Eclipse Phase* (Posthuman Studio, LLC., 2010) (<http://eclipsephase.com/releases>)
- Film: *A Fistful of Dollars*(1967), Directed by Sergio Leone, Produced by Arrigo Colombia, and Giorgio Papi, Starring by Clint Eastwood and etc.
- 日本アニメーション: CANAAN (2009)、(原案) 奈須きのこ、(監督) 安藤真裕、(声優) 大塚明夫、坂本真綾、沢城みゆき他、(製作) Project CANAAN
- 浅野裕一訳『孫子』講談社、1997年
- 金谷治訳『新訂孫子』岩波書店、2000年
- マーチン・ファン・クレフェルト、佐藤佐三郎訳『補給戦一何が勝敗を決定するのか』中央公論新社、2006年
- レン・デイトン、喜多迅鷹訳『電撃戦』早川書房、1989年
- 地球惑星物理学科 [火星] 東京大学理学部 地球惑星物理学科 . Retrieved June 01, 2011 (<http://www.eps.s.u-tokyo.ac.jp/jp/gakubu/geoph/space/mars.html>)

図像に関するクレジット

本書で利用しているイラストは以下の通り。『Eclipse Phase Core Rule』及び『Sunward The Inner System: A Location Sourcebook for Eclipse Phase』は Post Human Studio LLC よりクリエイティブ・コモンズ・ライセンス「表示 - 非営利 - 継承」ライセンスのもと出版されている。
p2 上部: Bruno Werneck 『Sunward』 p118
p2 右下: Bruno Werneck 『Sunward』 p105
ベースグラフィックデザイン: Adam Jury
レイアウト: 八重樫 尚史



クリエイティブ・コモンズ・ライセンス:
「表示 - 非営利 - 継承」 3.0 Unported
Eclipse Phase は、Posthuman
Studios LLC の登録商標です。

図像に関するクレジットの例外

以下の画像の使用に関してはクリエイティブ・コモンズ・ライセンスに則って管理されているものではありません。図像の無断複写・転載は禁止します。

小説のタイトル図像: ストックフォトサービス『iStockphoto』の写真を使用し、その使用許諾のもと八重樫尚史が加工して作成したものです。もとの写真の著作権は原作者に、加工後の図像の著作権は八重樫尚史個人に帰属します。